

Title	臨老での経験と現在とのつながり
Author(s)	増本, 康平
Citation	生老病死の行動科学. 23 p.11-p.12
Issue Date	2019-03-09
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73610
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

臨老での経験と現在とのつながり

Precious experiences in RINRO

(神戸大学) 増本 康平

(Kobe University, Graduate School of Human Development and Environment) Kouhei Masumoto

臨老開設 25 周年おめでとうございます。

私は 2000 年 4 月から 2007 年 9 月まで、大学院生として 5 年、助教として 2 年半の合計 7 年半、臨老に所属しました。私が臨老に所属していた当時の様子や大学院生、助教の時に何を考えてどのような研究を進めていたのか、それらが今の私の研究とどうつながっているのか、とりとめのない文章になりますが、本稿で思い返してみたいと思います。

修士課程: 私が修士課程だった時、臨老には院生だけでも 20 名近くいたように記憶していますが、それぞれの院生が自分の研究テーマを持ち、自由に研究を進めていました。そのため、一つの研究室で行われているとは思えないほど幅広い高齢者を対象とした研究が行われ、多くの刺激を受けました。

一方で、当時はまだ臨老で博士号を取得し、大学に就職した先輩もいませんでした。そのため、院生は自分たちがどのような研究で何をアピールすれば大学のポストに就くことができるのか、いつもそのことを考えて研究していたように思います。

私は記憶障害を呈する方の記憶リハビリテーション（記憶リハ）方法に関心を持ち、実演効果と呼ばれる記憶方略に関する研究を行うと決めました。ただ、データを収集できるフィールドがなければ研究はできません。アルツハイマー病の方のデータをどこで測定するか悩みなながらもゼミ発表をした後、柏木先生の部屋に呼ばれ、その場で、淀川キリスト教病院老人保健施設に連絡していただき、実験ができるよう紹介いただいたことを今でも鮮明に覚えています。M1 の院生が考えた拙い研究計画にもかかわらず、すぐにフィールドをご紹介いただいた柏木先

生の寛大さに、学生を指導する立場になり改めて気づくとともに、感謝しかありません。実験は順調にすすみ、特定の記憶方略を使用することで、アルツハイマー病の記憶成績が大きく向上することがわかりました（増本・高井, 2002; Masumoto et al., 2004）。

博士課程: 博士課程では、記憶リハへの展開を目指し、さらに応用的な研究をするのか、それとも記憶方略によってなぜ記憶成績が向上するのかを明らかにする基礎的な研究をするのか悩みました。ですが、医療現場で働くための資格をもっておらず、将来的に記憶リハに従事する可能性はないと考え、脳イメージング装置と認知神経心理学的アプローチを用いた研究を行うことにしました。池田市にある産業技術総合研究所関西センターには、脳磁図（MEG）があり、そこで研究をされている先生の実験の手伝いをしながら、脳磁図の実験の仕方を学びました。産業技術総合研究所で研修生として学ぶにあたり、恒藤暁先生には関西センターまでご足労いただき、研修を受けられるようご挨拶いただきました。

MEG を用いた研究から実演効果に関連する脳部位を特定し、そこから情報処理のメカニズムを推測することができました（Masumoto et al., 2006）。また、MEG で明らかになった脳部位を損傷した方を対象とした認知神経心理学的研究によって、その脳部位が実演効果に関与していることを確認することができました。しかし、この研究は査読者に研究の面白さが伝わらず、何度もリジェクトされ、データを追加しながら、論文として掲載されるまで結局 10 年もかかり、改めて論文を書くことの難しさを実感した研究でもありました（Masumoto et al., 2015）。

助教時代: 博士論文の執筆中、「記憶機能の向上＝日常生活の記憶に関する問題の改善」という前提に疑問を持ちました。そこで、高齢者の日常生活の記憶の問題に影響する要因を検討する研究を、藤田綾子先生、学部生や院生と一緒に進めました（増本ら、2007; Masumoto et al., 2011）。健常な高齢者の日常生活のし忘れには、記憶成績が影響していないことが示され、この研究は今も高齢期の記憶の問題を考える上で私が大切にしている研究となっています。

また、現在、京都府立医科大学にいる上野大介先生が M1 の時、面白いと見つけてきたポジティブ・エフェクトに関する論文からスタートした高齢期の認知機能と感情に関する研究は、現在の私の研究のテーマにもなっています。

現在の取り組みと臨老とのつながり: 臨老を去った後も佐藤眞一先生、権藤恭之先生から専門書の執筆、学会のワークショップや臨老発表会にお誘いいただき、研究者として研鑽を積む機会をいただいています。また、2015 年に神戸大学に神戸アクティブエイジング研究センターを設立することができ、臨老の卒業生である原田和弘先生や神戸大学の同僚の先生方と一緒に、超高齢社会の日本が抱える問題の解決を目指し様々な研究プロジェクトを展開しています。

藤田綾子先生を偲んで: 最後に、2018 年 4 月にお亡くなりになられた藤田綾子先生との思い出にふれたいと思います。藤田先生は私の博士課程での指導教員というだけでなく、初めての上司でもありました。講座所属ではない、人間科学研究科行動学系の全体の助教であった私が、事務的な仕事に忙殺されることなく、集中して研究に取り組めるように、藤田先生が影でフォローしてくださっていたと、別の先生から教えていただきました。そのおかげで助教時代に研究に集中することができ、藤田先生のご配慮には、感謝してもきれません。また、そばで藤田先生と学生との関わりをみさせていただいて、学生が自発的に研究に取り組むための環境づくりにご尽力され、心がおれそうになった学生を最後まで支えていらっしゃった姿を見て、学ぶことも多くありました。

私が島根大学に勤務していた時、集中講義にきていただき、出雲大社にご一緒したことも良い思い出となっています。また最近では、宝塚市でエイジフレンドリーシティの取り組みをされているとお聞きしていた矢先の訃報でした。なぜもう一度お会いする機会を持たなかったのか、悔やんでも悔やみきれません。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

おわりに: 論文はデータに基づき客観的に記述することが求められます。ですが、執筆者にとっては、誰と一緒に研究したのかという思い出も含んでいます。私と臨老の関わりを示す一つの形として、下記に臨老でおこなった研究に関する論文を記します。

引用文献

- 増本 康平・高井 恒夫 (2002) 被験者実演課題を用いた Alzheimer 病患者のエピソード記憶に関する研究, *神経心理学*, 18(4), 239-246.
- Masumoto, K., Takai, T., Tsuneto, S. & Kashiwagi, T. (2004) Influence of motoric encoding on forgetting function of memory for action sentences in patients with Alzheimer's disease, *Perceptual and Motor Skills*, 98, 299-306.
- Masumoto, K., Yamaguchi, M., Sutani, K., Tsuneto, S., Fujita, A., & Tonoike, M. (2006) Reactivation of physical motor information in the memory of action events. *Brain Research*, 1101, 102-109
- 増本 康平・林 知世・藤田 綾子 (2007) 日常生活における高齢者の展望的記憶に関する研究 *老年精神医学雑誌*, 18(2), 187-195.
- Masumoto, K., Nishimura, C., Tabuchi, M. & Fujita, A. (2011) What factors influence prospective memory for elderly people in a naturalistic setting? *Japanese Psychological Research*, 53, 30-41.
- Masumoto, K., Shirakawa, M., Higashiyama, T., & Yokoyama, K. (2015) The role of movement representation in episodic memory of actions: A study in patients with apraxia. *Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology*, 29, 1-12.